

立間祥介訳

三 国 志 一

平凡社

立間祥介訳

三 国 志 二

訳 者 紹 介

立間祥介 1928年東京生。善隣外事専門学校卒。
専攻 中国文学。慶応義塾大学教授。主訳書『従文自
伝』(河出書房)『中国講談選』『呼蘭河の物語』『児
女英雄伝』『今古奇観』(共訳)(平凡社)『駱駝祥子』
(岩波書店)

三 国 志 コンパクト版 第二巻

発行日 一九八八年二月九日 初版第一刷

定価 一〇〇〇円

訳者 立間祥介(たつま・しょうすけ)

発行者 下中 弘

発行所 株式会社 平凡社

〒一〇二 東京都千代田区三番町五

電話・東京(〇三)二六一―一七六五(編集)

(〇三)二六五―〇四五五(営業)

振替・東京八一二九六三九

印刷 東洋印刷株式会社

製本 和田製本工業株式会社

落丁・乱丁本は小社サービス係でお取替えいたします(送料小社負担)

ISBN4-582-32512-2

三国志主要人名表

配列は五十音順。

* 関羽・張飛の生年は正史に記載なく『三国志』によった。

袁 熙（?—二三七）字は顕奕。袁紹の次子。

袁 術（?—一九六）字は公路。袁紹の従弟。淮南（九

江）で成を建て、一時帝位を僭称する。

袁 尚（?—二三七）字は顕甫。袁紹の末子。

袁 紹（?—二三三）字は本初。漢の名門の出で河北に

強大な勢力を張る。性は優柔不断、ために官渡で曹操に大敗を喫する。

袁 譚（?—二三三）字は顯思。袁紹の長子。

王 允（二三七—一九六）字は子師。憂国の文官。董卓暗殺

の立役者。

賈 詡（二四〇—二三三）字は文和。はじめ董卓に仕え、の

ち曹操に仕える智將。

郭 嘉（二一〇—二三三）字は奉孝。曹操の片腕といわれた

幕僚。

郭 汜（?）幼名阿多。董卓の部將。李傕とともに、

一時天下をとる。

夏侯淵（?—二三三）字は妙才。夏侯惇の従弟。惇とと

もに曹操の挙兵に参加、以来数々の戦功を立てる。

夏侯惇（?—二三〇）字は元讓。曹操挙兵以来の部將。

曹丕即位のとき大將軍となる。

何 進（?—一九六）字は遂高。靈帝の外戚で無能な成

上り者。

関 羽（?—二三三）字は雲長。劉備に兄事する文武両

全の名將。信義に厚く、大薙刀をとっては天下無敵。

蜀の五虎將の一。

甘 寧（?—二三三）字は興霸。孫權の部將。

魏 延（?—二三三）字は文長。劉表の部將。のち劉備

に仕える。

許 褚（?）字は仲康。曹操の武將。親衛隊長として

常に身辺に侍す。

黄 董（?）字は公覆。孫堅父子三代に仕えた部將。

赤壁の合戦に際し苦肉の計を献じる。

公孫瓚（?—一九六）字は伯珪。河北の豪族で劉備の学

友。

黄 忠（?—二三〇）字は漢升。弓の名手。劉備父子に

仕えた蜀の五虎將の一。

孔融（一五—一〇六）字は文舉。孔子二十世の孫。文名

高く建安七子の一に数えられる。

周倉（？—三〇）黄巾の殘党で、関羽を慕つてその

部将となる豪傑。正史には見えない。

周泰（？）字は幼平。孫策・孫權の部将。

周瑜（一五—三〇）字は公瑾。孫策の義弟。孫權を助

け、呉の大都督として赤壁の合戦で威名を馳せる智

将。

荀彧（一〇—三三）字は文若。曹操の幕僚。

諸葛瑾（二七—三四）字は子瑜。諸葛亮の兄。孫權の幕

僚。

諸葛亮（二—三四）字は孔明。別名臥竜。襄陽郊外の

隆中に隱棲中すでに天下三分の計をたて、劉備の三

顧の礼にこたえて出應、非力の劉備を助けて蜀を建

てる不世出の奇才。

徐庶（？）字は元直。一名單福。諸葛亮の学友。は

じめ劉備の軍師、のち曹操に仕える。

曹仁（二六—三三）字は子孝。曹操の従弟。曹操に従

つて転戦、曹丕即位後、大司馬となる。

曹操（一五—二三）字は孟徳。幼名阿瞞。「乱世の奸

雄、治世の能臣」といわれ、權謀術数にたけた文武

両全の英雄。幕下に多くの人材を集め、天機をつか

んで中原を統一、魏王となる。魏の武帝。

曹丕（二七—三三）字は子桓。曹操の長子。文武両道

にたけ、のち献帝を廃して魏を建てる。魏の文帝。

孫堅（一五—九二）字は文台。孫子の末孫。弱年より

勇名をうたわれ、董卓討伐戦で洛陽一番乗りの偉功

を立てる。

孫權（二—三五）字は仲謀。孫堅の次子。父兄の業

を継ぎ呉を建てた名君。呉の大帝。

孫策（一五—三〇）字は伯符。孫堅の長子。堅の没後、

幕下に人材を集めて江東の基礎をきずく。

趙雲（？—三三）字は子竜。劉備に仕え当陽の長坂

坡で単騎百万の敵中を突破、幼主劉禪を救出した英

雄。

張角（？—一八）読書人出身の黄巾の乱の首謀者。

大賢良師・天公將軍と自称。

張郃（？—三三）字は儁乂。袁紹の部将。のち曹操

に仕える。

張松（？—二三）字は永年。劉璋の幕僚。劉備に益

州の地図を献じ入蜀の手引きをする。

張 昭（二五—三三）字は子布。孫策・孫權の幕僚。孫

策の信任を受け、呉の重鎮となる。儒学の造詣深く、

『春秋左氏伝解』『論語注』を著わす。

貂 蟬（？）王允の館の妓女。王允の意をうけて董卓

の侍妾となり、呂布を董卓暗殺にはしらす美女。正

史には見えない。

張 飛（？—三三）字は翼徳。劉備・関羽に兄事する。

直情径行、武勇拔群の勇将で、長坂橋では一喝、曹

操の大軍を退ける。蜀の五虎将の一。

張 遼（二六—三三）字は文遠。はじめ呂布に仕え、の

ち曹操の部将となる。情義に厚く、関羽と肝胆相照

らす仲となる。

張 魯（？）字は公祺。五斗米道の教祖として三十年

にわたり漢中に君臨、のち曹操に降る。

陳 宮（？—一九）字は公台。曹操打倒を念願とする

呂布の幕僚。

陳 琳（？—三三）字は孔璋。建安の七子の一。文才

をもつてはじめ袁紹に仕え、のち曹操に仕える。

程 昱（四—三三）字は仲徳。曹操の幕僚。

程 普（？）字は徳謀。孫堅父子三代に仕えた文武両

全の部将。

陶 謙（三一—三六）字は恭祖。徐州の牧。劉備に徐州

を譲る。

董卓（？—一九）字は仲穎。残忍好色な隴西の豪族。

強大な武力を背景に献帝を擁立し、専横をきわめる。

馬 超（二六—三三）字は孟起。馬騰の長子。劉備父子

に仕えた蜀の五虎将の一。

馬 騰（？—三三）字は寿成。漢の伏波將軍馬援の末孫。

巨軀強力の隴西の豪族。

龐 統（二九—三四）字は士元。別名鳳雛。劉備の軍師。

諸葛亮と並び称される知恵者。

李 傕（？—一九）董卓の部将。董卓の没後、郭汜と

ともに長安に乱入し、一時天下をとる。

劉 琦（？—三六）劉表の長子。温厚篤実の人であつ

たが継母蔡氏にうとまれ、江夏へはしって劉備の庇

護下にはいる。

劉 協（二—三四）後漢第九代の皇帝。献帝。曹丕に

廃され山陽公となる。

劉 璋（？—三六）字は季玉。益州の牧。暗愚のため、

手を拱いて劉備に益州を奪われる。

劉禪（二〇七—二七二）字は公嗣。幼名阿斗。劉備の子。

宦官を寵愛して亡国を招く暗君。蜀の後主。

劉備（一六一—二三三）字は玄德。漢の中山の靖王の末孫。

黄巾の乱にさいして関羽・張飛とともに挙兵。軍師

諸葛亮の助けを得て蜀の主となる。蜀の昭烈帝。

劉表（一四一—二〇八）字は景升。荊州の牧。

呂布（？—一九八）字は奉先。後漢末随一の武勇をう

たわれながら、転変常なき性格のため天下の嫌われ

者となる。

魯肅（一七三—二二三）字は子敬。孫權の幕僚。蜀との提

携に腐心する。周瑜の没後、呉の大都督となる。

目次

第十八回

賈文和 敵を料つて勝を決し
夏侯惇 矢を抜いて晴を啖う

第二十三回

禰正平 衣を裸いで賊を罵り
吉太医 毒を下つて刑に遇う

第十九回

下邳城に 曹操兵を盡にし
白門樓に 呂布命を殞す

第二十四回

国賊 兇を行なつて貴妃を殺し
皇叔 敗走して袁紹に投ず

第二十回

曹阿瞞 許田に打囲し
董国舅 内閣に詔を受く

第二十五回

土山に屯して 関公三事を約し
白馬を救つて 曹操重圍を解く

第二十一回

曹操 酒を煮て英雄を論じ
関公 城を賺きとつて車胄を斬る

第二十六回

袁本初 兵に敗れ將を折れ
関雲長 印を掛け金を封ず

第二十二回

袁・曹 おのおの馬歩三軍を起こし
関・張 共に王・劉二將を擒とす

第二十七回

美髯侯 千里を単騎で走り
漢寿侯 五関に六將を斬る

88

67

47

19

3

190

172

149

135

109

第二十八回

蔡陽を斬つて 兄弟疑を釈き
古城に会して 主臣義に聚る

211

第二十九回

小霸王 怒つて于吉を斬り
碧眼児 坐して江東を領す

237

第三十回

官渡に戦つて 本初敗續し
烏巢を劫つて 孟徳糧を焼く

258

第三十一回

曹操 倉亭に本初を破り
玄徳 荊州に劉表を依る

283

第三十二回

冀州を奪つて 袁尚 鋒を争い
漳河を決して 許攸 計を献ず

302

第三十三回

曹丕 乱に乗じて甄氏を納め
郭嘉 計を遺して遼東を定む

325

第三十四回

蔡夫人 屏を隔てて密語を聴き
劉皇叔 馬を躍らせて檀溪を過ゆ

348

主要人名表

前付

地 図

367

三国年代対照表

369

三^{さん}

国^{ごく}

志^し

二

立^{たち} 羅^ら

間^ま 貫^{かん}

祥^{しょう}

介^{すけ} 中^{ちゅう}

訳 作

第十八回

賈か文ぶん和わ 敵はかを料はかつて勝かちを決けつし
夏か侯こう惇とん 矢やを抜はいて晴はるを啖くわう

さて賈か詡くは曹操の意中を見抜いたので、その裏をかこうと、張ちやう繡しゅうに言った。

「それがし櫓より見ておりましたところ、曹操は三日の間当城のまわりを窺のぞつておりました。彼は東南角の煉瓦の色の違い逆さか茂も木ぎの傷いたみのはげしいのを見て、かしこから攻めいる腹を決めたに相違ありませぬ。それ故、西北の方に草を積み上げて氣勢をあげ、わが方を西北に引きつけようとしておるもの。必ずや夜陰にまぎれて東南角から乗りこんでくるでござりましょう」

「しからば、どうしたらよいのじゃ」

「それはいと易やすきこと。明日、屈強の者どもに十分の兵糧をとらせ、身軽な出立いでたちをさせて東南の民家にひそませた上、百姓どもに兵士の恰好をさせて西北を固めおるよう見せかけ、夜、寄手が東南の隅すみにとりついても相手にならず、城壁を乗り越えたと見るや、石火矢を合図に一度に伏兵を繰り出せば、曹操を手捕りともできようものにござる」

張繡は喜んでその計に従い、手筈をととのえた。これを早くも見てとった物見の兵が、張繡は

城中の兵をことごとく西北角にあつめて氣勢をあげ、東南角を空からにしていると報告してきたので、曹操は、

「わしの思う壺じゃ」

と、鋤・鍬など城壁によじ登るための道具をひそかに用意するよう命じて、昼の間、軍をひきいて西北角ばかり攻めたて、二更にかかる頃、折りすぐった兵をひきいて東南角の壕を越え、逆茂木を切り開いた。それでも城内しんと静まりかえっているのので、一斉になだれこむところ、石火矢の音一発、伏勢四方から討って出た。曹操があわてて軍を退けば、張繡自ら屈強の者どもをばげまして斬りたてたので、惨敗を喫して数十里も敗走した。張繡は明け方まで揉み立ててようやく味方をまとめ、城に引き揚げる。曹操が損害を調べたところ、討ち取られた兵五万余、失った輜重数知れず、呂虔りけん・于禁うきんまで手傷を受けていた。

さて賈詡は曹操が敗走したのを見るや、劉表りゅうひょうへ使者をやつて、その退路をたちきらせるよう張繡に勧めた。劉表は書面を受け取り、ただちに出馬しようとしてるところへ、孫策そんさくが湖口ここうに兵を出しているとの早馬。

「孫策が湖口に兵を出したのは、曹操の計でござります。いま曹操が破れた機に討ち取つてしまわねば、先ざき禍いの種となりましようぞ」

と蒯良かいりょうに言われて、劉表は黃祖こうそに命じて長江よりの道筋を固めさせ、己は自ら軍勢をひきいて安衆あんしゅう県に出陣、曹操の退路を絶つこととし、張繡にこの旨を知らせた。張繡は劉表が出陣した

と知るや、賈詡とともに軍勢をひきいて曹操を追った。

ここに曹操の軍はしずしずと退いて来たが、襄城じょうじょう県に着いて清水しみずにさしかかった時、曹操がにわかに馬上で声をあげて泣き出した。皆が驚いてそのわけを尋ねると、曹操は、

「去年ここで落命した大將てんし典章のことを思い出し、われにもあらず泣いてしまったのじゃ」

と言ひ、そこで軍を止めて追悼の祭りを盛大にとり行ない、典章の亡魂をなぐさめたが、曹操が自ら香を焚き涙ながらに礼拝するありさまを見て、全軍深く感じいったものであった。典章の供養を済ませたあと、甥そうあんの曹安民と長子そうこう曹昂ならびに陣没した將兵を供養し、射殺された大宛馬ペルシヤまでも祭った。翌る日、にわかに荀彧じゆんいくからの使者が到着して、

「劉表が張繡に加勢し、兵を安衆に出して、味方の帰路を絶とうとしております」

と知らせて来た。曹操は、

「わしが日に数里しか進まぬのは、賊が追ってくるのを知らぬからではない。考えあつてのこと故、安衆に至らば必ず張繡を破つてみせる。按ずるには及ばぬ」

との返書を使者に渡し、軍を急がせて安衆県にさしかかった。時に劉表の軍勢はすでに要害を固め、背後からは張繡の軍勢が迫っている。曹操は夜陰にまぎれて山道を切り開かせ、伏勢をひそめた。劉表・張繡の両軍は、空が白んでくるころ合流したが、曹操の軍勢が少ないのを見て曹操が落ちのびたものと思ひ、兵をひきいて山あいの道に攻めこんだ。そこを、曹操、伏勢を一時に出してさんざんに打ち破り、安衆県境の要害を突破して平地に陣を取った。劉表・張繡はそ

れぞれ敗兵をとりまとめていっしょになり、

劉、

「何と、むざむざ曹操の奸計に落ちたな」

張、

「急ぐことはござらぬ。ゆるゆると討ち取ることにはいたそう」

と、両軍安衆に集まった。

さて荀彧は袁紹が兵をおこして許都を侵そうとしているのを探知したので、急遽曹操に使者を差した。曹操はその書面を得て、あわててその日のうちに引き揚げることにした。間者がこれを張繡に知らせたので、張繡が追おうとするのを、賈詡が、

「追うことは禁物、追えば必ず敗られましょうぞ」

と止めたが、劉表が、

「今日追わぬは、いたずらに好機を逃すというものじゃ」

としきりに張繡を誘い、一万あまりの兵をひきいてともに後を追った。十里あまりして曹操の後詰の軍に追い付いたが、曹操の軍勢の思いもよらぬ奮戦に、追手の両軍は大敗を喫してもどつた。張繡が賈詡に、

「貴公の言を聞かず、見事にやられて参ったわ」

と言うと、賈詡、

「今こそ軍を揃えて追撃なさいませ」

「敗れて帰ったばかりのいま、もう一度追えとは」

と、二人が訊くと、

「今度追えば、必ず快勝することができます。もしできなければ、それがしの首を進ぜましよう」

張繡はそれを信じたが、劉表は疑って出陣しようとしなかった。張繡が手勢をひきいて追撃したところ、曹操の軍は果たしてさんざんに駆け散らされ、軍馬輜重などを道筋に棄てて逃げ去った。張繡がさらに追い討とうとした時、にわかに行手の山かげより一隊の軍馬が押し出して来たので追撃をあきらめ、軍をとりまとめて安衆に引き揚げた。劉表が賈詡に尋ねた。

「先には屈強の兵をもって退却する兵を追ったのに、貴公は必ず敗れると言われ、後には敗兵をもって勝った兵を討つのに、貴公は必ず勝つと言われ、いずれもその通りとなった。全く逆のことを言われて、ともにお言葉にたがわなかったのはどうしてでござるか。なにとぞお教え願いたい」

「これはいとたやすきこと。將軍は戰略にたけておいでとは申せ、お見受けいたすところ曹操の敵ではござらぬ。曹操は破れたとはいえ、勇将を後詰として、追手を防ぐこと必定でござれば、味方がいかに手剛くとも相手にはなりません。故に敗られるは必定と思つたもの。また曹操が帰陣を急ぐのは、必ず許都に變事出来いたしたためにござれば、味方の追手を打ち破りし上は、

談論兵家促膝不嫌幃幄小
快勝負賈詡談兵



劉表・張繡に兵法の奥義を説く賈詡（左）。